

子規庵で考える

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：子規庵に行ったそうですね。

A：(林明夫：以下省略)はい。3月3日に教育経営品質研究会(開倫塾主催)の有志視察会として、研究会のメンバーの先生方と共に正岡子規が34歳で亡くなるまで過ごした子規庵(東京都台東区根岸2丁目5-11)を訪問しました。

現在、BSで毎週日曜日正午より再放送中のNHKの大河ドラマ「坂の上の雲」の子規庵の撮影セットは、この子規庵を再現したためか、正岡子規が6帖の間から隣の8帖の間にいる我々を見ているかのように思えました。

Q：子規庵はどのようなところですか。

A：(1)子規庵は、俳句・短歌の革新者正岡子規の旧居であり、子規は故郷松山から母と妹を呼び寄せ、明治27年2月にこの借家に移り住みました。

(2)子規は6帖の間に病臥しながら、文学の近代化のために精力的に情報発信を行い、8年後の明治35年9月19日、糸瓜の句三句を絶筆として34歳11か月の生涯を終えました。

(3)子規のまわりには、俳人高浜虚子・河東碧梧桐・寒川鼠骨、歌人香取秀真・伊藤左千夫・長塚節、画家浅井忠・中村不折を始め、友人・門人たちが常に集まり、句会や歌会、文学・美術談義を行いました。大学予備門以来の夏目漱石や森鷗外、与謝野鉄幹等も子規庵を訪れています。

(4)子規没後、母八重と妹律が子規門人と共に守り続けた子規庵は昭和20年4月の空襲で焼失しましたが、門人等の尽力により、昭和25年にほぼ当時のままの姿に再建され現在に至っています。(以上、子規庵保存会刊のパンフレットより引用)

Q：29歳の時に結核菌により脊髄カリエスと診断された子規は、子規庵の6帖の間に病臥しながら、隣の8帖の間に集う人々とどのような活動をしたのですか。

A：(1)30歳の時に第一回蕪村忌を始める。

(2)31歳の時に短歌革新に着手。松山から東京に発行所を移した「ホトトギス」の第一号を発行。

(3)32歳の時に中村不折から貰った絵具で初めて水彩画を描く。病室の障子をガラスに変える。

(4)33歳の時に伊藤左千夫、長塚節らと根岸短歌会に参加。第一回「山会」(写生文の会)を始める。

(5)34歳の時に新聞日本に「墨汁一滴」を連載開始。病室の前に糸瓜棚をつくる。「仰臥漫録」

を書き始める。

(6)35歳の時に連日麻痺剤を用いるも、「病牀六尺」を新聞日本に連載開始。「果物帖」「草花帖」などを寝ながら写生し続ける。9月18日絶筆三句を記し、9月19日午前11時ごろ死去、享年34歳11か月。9月21日、田端の大龍寺に埋葬される。会葬者150余名。戒名子規居士。

(以上、前掲のパンフレットより引用)

Q：子規庵で感じたこと、考えたことは何ですか。

A：(1)子規庵には、NHKの大河ドラマとして現在放送中の「花燃ゆ」の松下村塾と共通するものを感じます。

(2)正岡子規は6帖の間で病臥しながら、また、吉田松陰は3帖の間で、志を同じくする人々と共に現状を否定し、理想を求めました。

(3)子規には「三千の俳句を閲(けみ)し、柿二つ」があります。新聞日本の記者をしていた子規は重い病臥の中、新聞の俳句欄に寄せられる三千もの俳句の中から選句をしていました。よい俳句を選び新聞に掲載して作者の努力を称えると同時に、俳句を世に広めたいという教育者としての熱い思いが感じられます。方法は異なりますが、子規も松陰と同じく教育者であると考えます。

Q：学習塾や予備校、私立学校などの経営者・経営幹部・先生方に訴えたいことは何ですか。

A：(1)まずは是非一度、子規庵を御訪問頂きたく希望いたします。

(2)教育は場所を選ばないということです。正岡子規は重篤な病気のために6帖の間に病臥しながら、吉田松陰は獄中や3帖の間から自分自身を見つめ、あるべき姿を身近な人々を通して世に示し続けました。

(3)学習塾や予備校、私立学校の創業にあたって、正岡子規や吉田松陰と同じようにごく狭い場所からスタートした先生が多いのではないのでしょうか。例えば、私も35年前に栃木県足利市郊外の百頭(ももがしら)町にある8帖と6帖の長屋をお借りして開倫塾を始めました。

(4)創業者である先生方は、塾生や生徒の学校での成績を何が何でも上昇させて希望の学校への進学を果たし、塾生や保護者への責任を果たしたい。それのみが生きるすべである。それに加えて、塾生や生徒たちをどうにかしてあげたいという熱い情熱、高い志の下に教育をなさってこられたものと思います。

(5)そうであるならば、教育の原点に立ち返り、塾生や生徒たちにものごとの本質とは何かを原点から教え、共に学び合うことが求められます。

Q：何か提案したいことがあるのですか。

A：(1)はい。大学入試が2018年以降大幅に改革されようとしています。そうであるならば、私立中学校や公立中高一貫校の入試も大幅に変えるべきです。

(2)英語の入試を行うのであれば、今から準備をして英語の四技能(読む、聞く、書く、話す)を同一配点にする出題を必ずするように提言させていただきます。

(3)これからの社会で求められるのは、理数に強いイノベーションの担い手である企業家精神

に溢れる人材です。そのためには、小学校 1 年生から本格的な英語教育を、中学生には自分でものごとを考える力、批判的思考(クリティカル・シンキング)能力を備えた上で筋道立った議論が公の場でできる教育を、高校生にはものおじせず、どんどん留学できる能力を身に着けさせたく思います。

(4)学力を伸ばしたい生徒はどんどん伸ばす。入学試験で小学校 6 年生に、中学校 3 年生修了程度の学力レベルの英語検定 3 級合格や高校 1 年生修了程度の学力レベルの英検準 2 級合格を求めるのであれば、数学や理科も、国語や社会も中高範囲の出題を認めるべきと考えます。英語で中 3 ~ 高 1 の学力を求めるのであれば、学年の枠を取り払い全教科で同様にすべきと考えます。

(5)学力の不足する教科はどんどん遡及学習(よく理解していないところまで遡って学ばせること)をすることです。日本以外の多くの国の学校では、その学年相応の学力が身に着かない場合には原級にとどめおく制度が存在します。学力不足の生徒を放置しないで最後まで面倒をみることも教育では大切と考えます。

(6)創業の精神に立ち返り、何を教育すべきか、中学校に入学する子どもたちに受験を通して何を求めるのかを是非御一考ください。

Q：最後に一言どうぞ。

A：(1)6 帖の間から俳句の世界にイノベーションを捲き起こした正岡子規の著作を、是非一冊でも多く御熟読ください。

(2)同様に、3 帖の間から明治維新の担い手を数多く輩出した吉田松陰の著作も是非御熟読ください。